

“彼女の生きる力は奇跡のようだった” — カンヌ映画祭 ACID 部門

「今こそ この戦争を撮って世界に見てもらう必要がある。苦しみを全て記録するの。他に誰がやる？」

— ファトマ・ハッスーナ

「映画には、彼女たちのメッセージを伝える義務が、社会を映し出す役割がある。手遅れになる前に行動を。」

— カンヌ映画祭 2025 前夜、リチャード・ギア、マーク・ラファロ、ガイ・ピアース、レイフ・ファインズなど 350人以上の業界関係者がファトマ殺害と業界の沈黙を非難し署名した手紙より。



イスラエルによるガザ攻撃が続いていた2024年、イラン出身の映画監督セピデ・ファルシは、緊急に現地の人々の声を届ける必要性を感じていた。しかし、ガザは封鎖されており行くことは出来ない。そこで、知り合ったガザ北部に暮らす24歳のパレスチナ人フォトジャーナリスト、ファトマ・ハッスーナとのビデオ通話を中心とした映画の制作を決意する。以後、イランからフランスに亡命したため祖国に戻れない監督と、監督の娘と同じ年齢で、ガザから出られないファトマとのビデオ通話が毎日のように続けられた。そして、ファトマは監督にとってガザを知る目となり、監督はファトマが外の世界とつながる架け橋となり、絆を築いていく。

ファトマは空爆、飢餓や不安にさらされながらも力強く生きる市民の姿や、街の僅かな輝きを写真に収

め、スマホ越しにガザの様子を伝え続けた。監督が「彼女は太陽のような存在」と形容するようになり、彼女はいつも明るかったが、度重なる爆撃で家族や友人が殺されていくにつれ、表情を暗くしていく。そして悲劇はファトマをも襲う。2人が交流を始めて約1年後の2025年4月15日、本作のカンヌ映画祭上映決定の知らせを、ファトマは喜んだが、その翌日、イスラエル軍の空爆でファトマを含む家族7人が殺されてしまったのだ。25歳になったばかりのファトマの死は、本人が「もし死ぬのなら、響き渡る死を望む」と書いたように、世界中に波紋を広げることになる。



「ファトマは今夜、私たちと共にいるべきでした。芸術は残り続けます。」 — カンヌ映画祭 2025 審査員長 ジュリエット・ピノシュ 開会式スピーチ



登場人物: キビデ・ファルシ、ファトマ・ハッスーナ 監督: キビデ・ファルシ プロデューサー: ジョヴァンニ・ジョヴァネッリ 制作: Rôves d'Eau Productions, 24images Production 配給: ユナイテッドピープル
113分/フランス・パレスチナ・イラン/2025年 ©Sepideh Farsi Reves d'Eau Productions 原題: Put Your Soul on Your Hand and Walk

手に魂を込め、歩いてみれば



日時: 2026年8月1日(土) ①10:00~ ②14:00~ ※開場各15分前 定員各30名

(上映時間113分) 上映後自由参加の①シェア会②日本国際ボランティアセンターの方による解説トークあり

会場: 幕張公民館2F講習室(千葉市花見川区幕張町4-602)

参加費: 1,000円(当日会場にて現金払い) **予約優先** お申込はこちらから→

主催・お問合せ: NPO地球市民交流基金アーシアン(☎043-279-8665)

